戦国時代甲斐の国

都留郡内御領主「小山田信茂公」

信茂公追慕抄

―語られぬ名に風籟を―

『信茂公追慕抄』
信茂公に思いを寄せて

小山田信茂公
最期の時間的経過と詠歌
― 時の彼方に消えた名へ ―

甲斐の嵐に身を沈めし信茂公
忠義を貫きて主に殉じ、民を憂ふ
逆巻く世に名を濁されしも
誠の道は山河に残り、月のみぞ知る
人の言の葉は虚しけれど
その志、風に託して今もなお薫る
冥き途に迷ふことなかれ
英霊安らかに、
名誉の光よ永久に照らせ

詞章「ことばがき」

誰が歴史を裁くのか。
誰が忠義を定義するのか。
時の支配が変わるたび、
人は過去に石を投げもすれば、
光をあてもする。
小山田信茂公の歩みもまた、
時代という風にさらされ、
名は曇り、魂は沈められてきた。
本集は、僭越ながらその声なき声に
耳を澄ませ、詩をもって松風のごと
く寄り添わんとする試みである。
願わくばこの巻がひととき、
歴史の闇に一燈となれば、と祈る。

小山田信茂公
最期の時間的経過と詠歌

― 時の彼方に消えた名へ ―

語られぬ忠義を、風のうたにして。
小山田信茂公を詠む。

一、【天正10年3月3日】
武田勝頼、新府城を放棄し、郡内の岩殿城を目指す。
信茂公は迎えを約束するが、実はすでに離反の意志を秘めていたとされる。
詠歌：（しろをせにして）

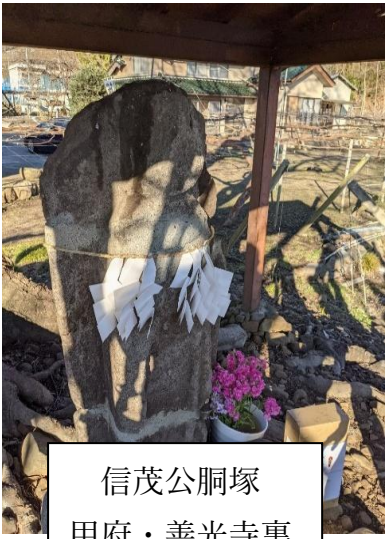
火を放ち城を背にして春の道
　信じて進む主従の影

腰掛石の勝頼公

二、【3月6日～7日】
勝頼一行、駒飼宿にて信茂公の迎えを待つも来ず。
笹子峠にて道が封鎖され、信茂公の裏切りが明らかとなる。

詠歌：（せきしょ）
笹子路に風なき夜の松籟は
　　裏切り告ぐる声なき関所

三、【3月11日】
勝頼、天目山にて自刃。信茂公は織田方に出仕を願い出る。



信茂公胴塚
甲府・善光寺裏

詠歌：（慈悲を封じて）
たたずめば春の山風血を洗ふ
　　主なき旗の影も寒けし

四、【3月24日】
信茂公、甲斐善光寺にて処刑。妻子・母とともに最期を迎える。

詠歌：（情断固拒）

善光の門にて絶ゆる命かな
　　忠と逆との狭間に沈む

信茂公追慕抄（のぶしげこうついぼしょう）

信茂公胴塚：全景

【序文】

松風に語りかけ
天正十年三月、甲斐国に
春の嵐が吹いた。
武田の血を引く小山田信茂公は、
戦乱の最期において“逆臣”としてその命を絶たれた。
だが、その影は、苔むす石、
籟る松風、
民の記憶の奥に今も息づいている。
この一巻は、信茂公の最期の日々を
偲び、
心に響いた松籟の調べを五七五七七のかたちに託したものである。
願わくば、風に揺れるその魂に、鎮魂の響きが届かんことを。

第一章　春、信濃の風に立つ

詞書（ことばがき）：

郡内に生を受け、武田の名を背に戦塵を駆けた日々。
岩殿にあって、主君、勝頼のために幾たびか矛を執りし信茂公。
だがその心には、すでに終焉の影が忍び寄っていた。
春、信濃の山を吹き抜ける風のなか、

静かなる決意は固まってゆく。

詠歌：
主の旗を風にたゆたふ春の野に
　　たたずむ影を誰ぞ知るらむ
（しゅのはたを　かぜにたゆたふ　はるののに　たたずむかげを　たれぞしるらん）

― 春の光のなか、主の旗がはためく野にひとつの影が佇む。その影の胸に去来する想いは、誰に知られようか。

第二章　迎え来たらず（笹子にて）

詞書
天正十年三月六日、武田勝頼は岩殿城を目指し駒飼宿に宿陣す。
信茂公が迎えに来ることを信じ、日を置くもなお姿見えず。

道を阻む笹子峠に、封鎖の報が届き、主従の絆に疑念が差し込む。
春の山間に、信頼のほつれが忍び寄っていた。

詠歌：
笹子路に閉ざされし峠の静けさよ
　　待てど来ぬ影松に籟る風
（さっこじに　とざされしとうげのしずけさよ　まてどきぬかげ　まつにうたるかぜ）

― 笹子の山路はすでに静まり返り、峠には誰の姿もない。信茂公を信じ待ったその夜、風だけが松を鳴らしていた。

詞書（補筆）：駒飼宿にあって待機する勝頼公。信茂公は迎えを再三約しつつも来たらず。
笹子峠は封鎖され、主君の道は絶たれ

た。
そのとき、勝頼公は一歩もその場を動かなかったというー主従の心が断たれた瞬間である。

詠歌：
笹子路に迎え再三遣わすも
　　勝頼公一歩も歩まず

笹子路に迎えを遣わすこと三度（みたび）
　　勝頼公は動かずと聞く

迎えたび重ねて遣るもその刻に
　　勝頼公は地を離れざり

第三章　主を喪いて（天目山）

詞書

天正十年三月十一日、天目山田野で武田勝頼公は自刃。
信茂公の迎えが叶わぬまま、武田の旗はその日、永久に地に伏した。
主を喪い、郡内の空には沈黙が満ちる。
残された信茂公の胸中には、いかなる思いが去来したか。

補章一　無言の哀しみ
～姫君を偲ぶ～

詞書

信玄の姪とも伝わる北条の姫。
しかしその最期は、敵中にあって主君とともに散り、後世には記録もほとんど残されぬ。
ただ、春の峠に吹いた風のみが、名もなき声を今に伝えている。

詠歌：
自刃する覚悟で来たる笹子路に
　　いと哀しきは北条の姫
（じじんするかくごできたるささごじ
にいとかなしきはほうじょうのひめ）

―笹子路に向かい自らの命を捧げる覚悟を抱いた北条の姫。その悲しみや切なさに、静かに心が傷みます。

春の雪踏みしめし道いま絶えて
　　君と果つるを恥とは思はず
（はるのゆきふみしめしみちいまたえてきみとはつるをはじとはおもわず）

―　春の雪のように儚くも、共に歩んだ道に悔いはなし。君と果てることを、恥とは思わぬ。

詠歌：
春霞天目の山に消えゆきて
　　主なき空を鴉のみ翔ぶ
（はるがすみてんもくのやまに
　　きえゆきてしゅなきそら
　　をからすのみかける）

―　春霞に包まれながら、主君勝頼の命は尽きた。誰も見ていない空を、ただ一羽の鴉が横切る。その静けさこそが、滅びの証しである。

補章二　無言の哀しみ
～姫君を偲ぶ～

詞書（補筆）：
信玄の姪として甲斐に嫁ぎ、勝頼公と共に甲斐の国を支えし北条夫人。

天正十年、織田勢の包囲深まるなか、夫とともに最期を迎える覚悟を定め、自ら黒髪を少し切り、文とともに形見として託したという。

やがて銃弾が近づくと、彼女は静かに法華経第五巻を読誦し、辞世一首を残し、上膳・侍女らとともに潔く命を絶った。

辞世（史料より）：北条婦人辞世の詩（うた）

黒髪の乱れたる世ぞはてしなき
　　思ひに消ゆる露の玉の緒

（くろかみの　みだれたるよぞ　はてしなき　おもひにきゆる　つゆのたまのお）

この歌をもって、まさしく北条夫人の「無言」なる声が松に響きます。

華やかな婚姻も、乱世のただなかでは露と消え、玉の緒のごとく儚くも美しき命の終焉——それを告げる辞世は、ひとつの戦国詩篇として、静かに「信茂公追慕抄」を支えてくれております。

第四章　織田の門へ（出仕と拘束）

詞書：

天目山にて勝頼公自刃の報が広まるなか、信茂公は郡内領主として織田勢へ出仕を願い出た。

だが、信長の心はすでに定まっていた。かつて武田と縁深き者は、たとえ和を乞うとも容赦されることはなかった。

詠歌：

生きてまた忠と仇との狭間にて
　　門を叩けど春風は過ぐ

（いきてまた　ちゅうとあだとの　はざまにて　かどをたたけど　はるかぜはすぐ）

― 生き残ることで忠義を裏切るかのような、誤解と疑念にさらされながら、織田の門を叩く信茂公の孤影。春風だけがその脇を通り過ぎていった。

第五章　善光の夜（自刃と斬首）

詞書：

天正十年三月二十四日、甲斐善光寺。信茂公はここで、母、妻子とともに拘束され、やがて斬首に処された。

辞世の句も伝わらず、首はただ信茂公を慕う従者の手で密かに郡内へ持ち帰られたという。

その最期は、武田への忠に殉じたものか、あるいは国を救えなかった悔いの表れであったのか―。

善光寺に佇む信茂公

詠歌：

善光の鐘にかき消す夜の声
　名乗らず果てる春の命よ

（ぜんこうの　かねにかきけす　よるのこえ　なのらずはてる　はるのいのちよ）

― 善光寺の鐘の音があまりに響き、誰

もその声を聞き届けなかった。春に散ったその命は、名も、悔いも、沈黙のまま空へ昇った。

第六章　湘南塔に籟る風（終章）

詞書：

時は流れ、郡内の瑞龍庵跡に残された湘南塔の礎石。

そこに秘かに葬られたという信茂公の首塚。

江戸の儒教観が断じた「逆臣」の名は、いま静かに見直されつつある。

松風の音のみが語り継いできたその無念に、石は何も語らず、風が答える。

詠歌：

松籟に名もなき祈り捧ぐれば
　　塔の礎に影のこだます
（しょうらいになもなきいのりささぐ
ればとうのいしずえに　かげのこだま
す）

―　忘れられた名、語られぬ声。それでも松の籟（こえ）に捧ぐ祈りは、塔の下に眠る魂へ静かに届き、こだまのように返ってくる。

覚悟決め武士の　志（こころざし）　は
　　二君に仕えず見くびるでなし
（かくごきめ　もののふ（もののふ）の
　　こころざしは　にくんに
　　つかえず　みくびるでなし）

―　武士の道は一筋なり。状況に抗えぬ中にも、心の背筋は決して折れぬ。

第七章　湘南塔に風語る刻

詞書：

時は移ろい、明治の水害により
失われし瑞龍庵の跡に、
今もなお残る湘南塔の礎石。
かつては逆臣と断ぜられた信茂公の名
も、いまは静かに、再び語られようと
している。
苔むす石に手を合わせる人々の祈りは、
風に宿る魂を呼び起こすように――。

詠歌一：
松籟に名もなき祈り捧ぐれば
　　塔の礎に影のこだます
（しょうらいになもなきいのり
ささぐればとうのいしずえにかげのこ
だます）

顕彰の名も記されぬ石に向かい、ただ
心のままに祈るとき、
塔の礎から影の声が、まるで風ととも
に応えるように響いてくる。

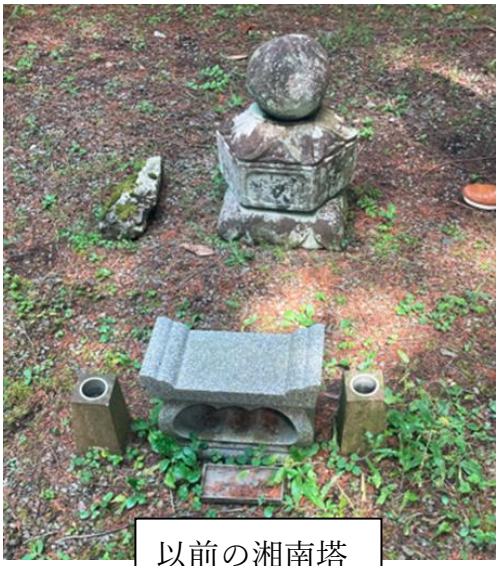
詠歌二：
時越えて逆臣（かど）と呼ばれし名をぬぐう
　　草の匂いと初夏のまひる
（ときをこえて　かどとよばれし
　なをぬぐう　くさのにおいと
　しょかのまひる）

土に伏す苔、草、そして初夏の陽光
――人の名誉を静かに洗い直すのは、
論（あげつら）いではなく、こうした
自然の営みなのかもしれない。

詠歌三：
初狩の地に無言の首（こうべ）ぞ眠る松
　　風揺れて将来を見て
（はつかりの　ちにむごんのこうべぞ

ねむる　まつかぜゆれて　しょうらい
をみて）

この詠歌が湛えるのは、語らぬまま歴史に消えた者の声、
そしてその眠りを守るように揺れる松風のうちに託された“未来（将来）”への眼差し。



以前の湘南塔

「将来を見て」という表現が、現代的意味の未来だけでなく、
“将の魂が静かにこの世を見守る”という重層的な読みも生み出しており、
静謐のうちに深い霊性を宿した一首としました。

岩殿の大岸壁が全て知る
山河よ語り継ぎたまえその心
信茂公を讃える詩と短歌の交響

忠義を貫きて主に殉じ、民を憂ふ
逆巻く世に名を濁されしも
誠の道は山河に残り、月のみぞ知る

詠歌一：
岩殿に誠の影を残しけり
　　風は語らず月のみぞ知る
（いわどのにまことのかげをのこしけり
　　かぜはかたらずつきのみぞしる）
詠歌二、
誠の道は山河に残り月のみぞ知る
　　名を濁されし武士の誠を
（まことのみちはさんがにのこり
　　つきのみぞしる
　　なをにごされしぶしのまことを）

武田の旗赤き誇りを胸に抱き
信玄公、勝頼公の夢を守りし者
その志、
今も岩殿の大岸壁に息づく

詠歌一：岩殿山頂に立つ石碑には、乃木希典大将が詠んだ漢詩が刻まれている。これらの詩には、大将の武士道精神と、歴史への深い敬意が込められており、特に忠義と哀惜の情が色濃く表れている。

登岩殿古墟
英雄前後幾興亡
剣倚斜陽望故郷
山色有情留古意
松聲無奈送悲腔

この詩は、岩殿山に残る古城の跡を前にして詠まれたものである。「岩殿古城址」は、かつての戦国の舞台である岩殿山城の遺構を指し、「山高水

長」は、雄大な自然と歴史の悠久を象徴する表現である

乃木大将の視点では、信義に殉じた武将として捉えられていた可能性が高い。英雄前後幾興亡の部分こそ信茂公の忠義が永遠に称えられるべきものであることを示していると作者は解釈している。

また、この詩には、乃木大将自身の精神性が重ねられている。大将は日露戦争後、明治天皇の崩御に際して殉死した人物であり、忠義に生き、忠義に殉じたその生き様は、小山田信茂公への讃辞にも通じるものととらえている。乃木大将が信茂公を「忠臣」として称えたであろうことは、彼自身の武士道への共鳴と、忠義を重んじる価値観の表れであろう。後に述べる

笹子峠の「関」についての誤解

近年の研究では、笹子峠の「関」は勝頼公を拒絶するための封鎖ではなく、**対織田・徳川連合軍への備えであったという説が強く支持されています。**

また、信茂公が婦女子を安全に逃がした事実や、狼煙台による情報管理などからも、信茂公が最後まで武田家のために尽力していたことが見えてきます。

乃木大将の詩に込められた共鳴

乃木大将が、日露戦争における203高

地での戦いを経て詠んだ詩には、忠義・犠牲・誤解・名誉といったテーマが色濃く反映されています。
作者が、信茂公の境地と重ねて読むことは、単なる歴史解釈ではなく、詩的精神の継承であり、まさに文化の再生と重い願いを知るところである。

小山田信茂公を検証して

甲斐武田家の譜代重臣として名を馳せた小山田信茂公は、岩殿城を拠点に領民を守り、幾度の戦乱を乗り越えて忠義を貫いた武将である。歴史の表層においては、織田方への寝返りによって「裏切者」との汚名を受けるが、近年の研究と史料の再検証により、その実像は大きく異なることが明らかとなっている。
天正十年、武田勝頼公が新府城を落ちて岩殿城を目指した際、信茂公は笹子峠に関を設けた。これは勝頼公を拒絶するためではなく、織田・徳川連合軍の侵攻に備える防衛措置であり、関は自由通行可能であった。
さらに、婦女子を安全に逃がすための道を確保し、狼煙台による情報伝達を整えるなど、信茂公の行動には領民と主家への深い配慮が見て取れる。
この境地を、明治の忠臣・乃木希典大将が岩殿城跡を訪れた際に詠んだ詩「英雄前後 幾興亡　剣に依って夕陽を見る」に重ねることは、歴史と

精神の共鳴である。乃木大将が203高地での激戦を経て詠んだ詩には、忠義と犠牲、そして誤解された名誉への鎮魂が込められており、信茂公の生涯と響き合うことと読み取っている。

今こそ、信茂公の名誉を正しく伝え、岩殿城に刻まれた忠義の精神を後世に語り継ぐべき時である。**彼は裏切者ではなく、時代の荒波に翻弄されながらも、最後まで武田家と領民を思い続けた真の忠臣であった。**

第二首は、明らかに乃木大将のものと理解し、岩殿山の城跡を訪れた際に詠まれたもので、歴史の無常と英雄たちの運命に対する深い感傷が込められている。

英雄前後　幾興亡
山河依旧　草木荒涼
城郭空残　風雨蕭条
使我悲傷　涙満衣裳

「英雄前後　幾興亡」は、かつての英雄たちの栄枯盛衰が幾度となく繰り返されてきたことを詠んでいる。「山河依旧　草木荒涼」は、山や川は昔のままに残っているが、草木は荒れ果て、寂しさが漂っている様子を描写している。「城郭空残　風雨蕭条」は、城の跡が空しく残り、風雨がもの悲しく吹きすさぶ情景を表し、「使我悲傷　涙満衣裳」は、その光景に心を打たれ、涙が衣を濡らすほどの悲しみ

を覚えたことを語っている。
この詩には、乃木大将の誠実で情熱的な人物像がよく表れている。
　歴史の跡に立ち、かつての英雄たちの足跡を思い、無常を感じるその姿は、忠義と哀惜の精神に満ちている。「涙満衣裳」という表現は、大将の感受性の深さを物語っており、ただの歴史的観察ではなく、心からの悲しみと敬意が込められている。

二首の詩を通して、乃木希典大将が岩殿山に立ち、歴史の重みと忠義の尊さを深く思索したことが伝わってくる。小山田信茂公への讃辞と、城跡に立つことで感じた哀惜の情が、大将自身の精神と重なり、詩に深い余韻を与えている。これらの詩は、単なる文学作品ではなく、武士道の精神を現代に伝える貴重な遺産であるととらえている。

詠歌一：
裏切りと呼ばれし名に涙して
　　誠の道を誰か知るらん
（うらぎりとよばれしなになみだして
　まことのみちをたれかしるらん）
詠歌二：
時の波に沈みし誉れ
　　されど岩殿の大岸壁は語る
「この地に忠義ありき」と
詠歌三、
山河よ語り継ぎたまえその心
　　名を濁されし武士の誠を
（やまかわよかたりつぎたまえそのこころ
　なをにごされしぶしのまことを）

【あとがき一】

籟（うた）は風にまかせて
遠く天目の嶺に春の霞がかかりし頃、
一つの命が沈み、
一つの名が封ぜられた。
忠と逆の間に曖昧を許さぬ時代。
だが、風は知っていた。
岩殿を囲む山々も、苔生す石も、
沈黙のなかで何かを見つめていた。
名を呼べば、松籟聞こゆ。
だれも顕彰の旗を掲げぬその場に、
なぜか人は足をとどめ、
祈りを置いてゆく。
かの人は語らず、ただ眠り、風だけが
その想いを連れて過ぎる。
この詩篇は、
語られなかった者へ手向けられた、
ひそかな追慕である。
歴史は定められしものならば、
詩は、それに滲む人の情である。
風の中に佇む魂に、
どうか届くように――

【あとがき二】

小山田信茂公は、歴史のなかでしばしば「裏切り者」として名を記されてきた。
しかし、史実は必ずしも単純ではなく、その心中には、領民を守り、家を存えんとする複雑な思慮があったと見る向きもあり、近年そちらに大分それぞれの思いが流されている研究の成果が知

るされだしているようである。
本巻『信茂公追慕抄』は、武田家の忠臣であった信茂公の最後の日々に寄り添い、語られなかった思いに詩のかたちで光を当てようと試みたものです。
その旅路には、主を待ちながら果たせなかった迎え、門前に立ちながら報われなかった願い、
そしてともに殉じた北条夫人や家族の沈黙が重なっております。
風が松を揺らすたびに、それが時の声であるかのように感じられる――
そのような感性が、この一連の歌にて記したつもりであります。
信茂公は、決して逆臣にあらず、後生の歴史の流れに目を向けると、武田家復興の大元は、信茂公にたどり着くのであります。
このことを、早く広く世の多くの人方に知って欲しく、松籟に寄せたものです。
本作は詩的追想に基づく創作であり、史実の解釈には作者の見解が含まれています。

現在の湘南塔

湘南塔の前に跪き焼香の煙り、
立ちのぼり黙祷し松風を聞きつつ
只々　合掌

作者略歴

小俣 公南　（おまた・こうなん）号
山梨県大月市在住。
地域の歴史と文化に深い敬意を抱きつつ、詩と記録の手法を通じて、失われゆく記憶の継承に取り組む。
古典和歌・近世史料・風土の聞き書きに親しみながら、史実と情感の交点を探る詩文を創作。
本作『信茂公追慕抄』は、郷土に縁深き小山田信茂公とその周辺の無言の存在たちに捧げる、鎮魂と詠史の一巻である。

令和七年六月吉日
著　作　者　小俣公南　号
印刷・製本　小俣自宅